

4月19日オープンした「現代郷土美術館」

写真・杉山 謙

現代郷土美術館の開設

平成三年四月十九日、前日までの雨もあがり、日の量が出るという瑞兆のもとに、当館待望の「現代郷土美術館」開館記念式典が、百名近い参会者により祝福のうちに催行された。

庄野理事長は「亀陽文庫」現館園内に銅像が建つ、

真藤慎太郎氏の遺志による、創設から現在に至る経緯
新館設立が『谷口コレクション』の寄贈により発想されたこと、これが多くの人々の善意に支えられていること、メセナ活動等と連携しての今後の展望を述べて挨拶した。

夫妻で出席された谷口治達氏は、含羞のうちに喜びと祝福と感謝を述べられた。

また、はるばる鎌倉からかけつけ、新館の展示作家代表として挨拶された大津英敏氏は、郷土出身らしく、郷土の風土と仲間を懐しみ、能古の

風光とその中に調和した新館を祝福された。

祝辞は友野隆（元福岡県教委教育長現九州産業大常務理事）氏で、能古島への親愛と、文化の拠点としての当館の意義、新館設立と将来の発展を願う心切

な餞であった。

小原著々子（色紙）

また、福岡市長桑原敬一氏、西日本新聞社長青木秀氏ほか多数の方から祝電がよせられた。

いわゆる

『谷口コレクション』の由縁、新館建設の経緯は、「季誌能古博物館だより」第七号に谷口治達氏が「郷土現代画家について」と題して、述べられている。

ここに重複は避けたいが、谷口氏と作家たちとの友好、初代館長竹中氏との交誼のうるわしき、理事長庄野氏の熱意とこの事業への傾倒、

能古博物館だより

さらには理事長との親交から生れた各方面の支援などは佳話として、小宴の間交々語られた。

『谷口コレクション』の収蔵作品は、二を除いて、油彩、水彩、素描、日本画、版画、彫刻の分野で殆んどが本県出身の作家である。

そして、功成り、名遂げた人もあり、かつ物故者もある。だが、なんと言っても、日展系、独立系、二科系、自由美術系、二紀系、九州派と称される人々、あるいは無所属等々の各流派に遑遑なくその名が連なっていることは偉観といふべきであろう。

さらに、その後いわゆる中央で活躍している人あり、欧米各地で活躍している人あり、郷土で黙々と製作を続け、後進の指導に当たる人ありと多士済々である。

これらの作家たちから「記念に」とか「友情のしるしに」と作品を寄せられたのはひとえに谷口氏の人柄、識見に作家達が魅せられたからであろう。

そこには人と人との出会いがあり、親しみがあがり、交誼の深さがある。それらのことに、この新館の持つ意義がある。

谷口氏が「新しい美術館まで建て

て展示してもらえらることになったのは幸運である」と言われるが、寄贈それ自体が当館にとって名譽なことであり、寄贈者の意図されるところを充分尊重したいという企図から生れたものである。

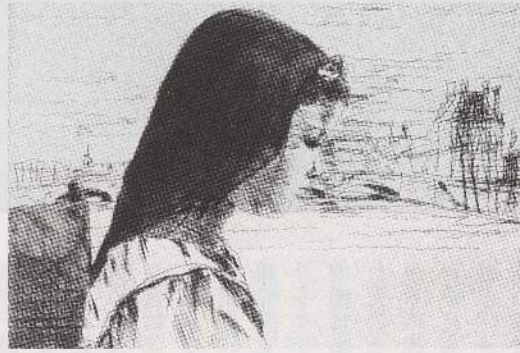
「五十余人の画家の中に物故者が増え、現代絵画の名から遠ざかりつつある」として、この作品群を基点に今後は同館が郷土現代絵画の集収を始め、展示に活力を加えて行く」のが今後当館に課せられた重要な使命であろう。

さらに谷口

氏の文章を引用する。

「私は福岡市の西区に住んでいる。西区は自然環境に恵まれているが、文化施設は乏しい。何かよい施設がほしいと常々思っていた。能古島も西区の一角であり、そこにユニークな博物館が出現したわけである。

開館後のある日、博物館を訪ねよ



大津英敏「ボンロワイヤル」エッチング・紙・160×200

うと姪浜渡船場から乗船してみると夏の緑に包まれた能古島は海中の宝玉のように輝いていた。その南斜面に建った白い博物館は島にさらにはめ込んだ小さな宝石さながらである。その時、庄野寿人理事長に初めてお会いし、博物館運営への並々ならぬ

熱情に接し深く感動したものである。

財団法人亀陽文庫の博物館なので、亀井南冥・昭陽を顕彰する資料の展示が主となるのは当然だろうが、もっと幅を広げて能古島との関わりも追求するとのお話であった。その一端として同島出身の近代洋画家多々羅義雄の遺作寄贈を受け、これを常設展示されているのは有意義であった。

忘却されかけていた質実の画業に光が当てられた。」
秋月に発足した亀陽文庫が十八年の年月を経、能古島に新築移籍したのが平成元年七月である。谷口氏の文章によれば三人の出会いのこの時、谷口氏、庄野理事長、竹中館長の胸に「谷口コレクション」と新館構想

が湧いていたようである。

新館はオフホワイトのしっとりとした落ち着いた木造二階建の展示棟である。先ごろまで渡船が島に近づくとき校の雲間にほんのりと本館により添って建っているのがまことに美しく望まれた。

これで、現代郷土美術の展示館がが発した訳である。

これから、更に内容の充実がなされなければならない。

と同時に、亀陽文庫能古博物館の初心忘るべからずの原点に立ち還り、収蔵品の充実、整理、展示にも一段の工夫努力が要求されるであろう。

近來、地方文化振興・生涯学習の声高く、昨年は国の省庁の枠を超えた法律も制定され、メセナ活動もようやく緒についた。

企業・大学等の収蔵品の展示公開の機会も増えている。また美術館・博物館も年々増加している。街の画廊も年間の予約が満杯状態と聞く。

このような状況の中での当館「現代郷土美術館」の発足である。

当館では理事会・館職員が全力を尽して皆様の期待に応えるべく努力し、大方のご教導、ご支援をお願いいたします。

福岡藩幕末歌人二川鶴子

—その生涯—

前田 淑

この稿は、筆者が福岡女学院短期大学紀要第十五号（一九七九年二月二十八日発行）に「その家系・生涯・作品」として発表されたもののうち、筆者のご了解を得て、「その生涯」の部分を掲載させて頂くものであります。

よりだ博物館古能

二川鶴子は、相近の長女として寛政八年（一七九六）、福岡城下榑木屋丁（現 唐人町一〜三丁目）の家に生まれた。彼女の生母は、さきに述べたように、相近の最初の妻菅氏で、寛政五年（一七九三）二川家に嫁し、旗雄と鶴子を生んだ。当時、相近はすでに書家として認められ、君命によって書字師（または書字士員）として召抱えられていた。また寛政七年、藩主斉隆が十九歳で薨じた折には、その柩の供をして、和歌を詠じたほどであった。

第8号 (3)

寛政十年（一七九八）は鶴子にとって、最も不幸なできごとが起った。それはこの正月、彼女の母は離別されて、二川家を去ったのである。このことは鶴子にとって生涯の悲しみであったにちがいない。後年、二川家と姻戚関係になった女流歌人野村望東尼の歌集『向陵集』の中に、嘉永二年（一八四九）秋の作として

二川つる子の君がかくれたる母の忌にこもりけるよしをきゝて
もみち葉の錦が中に君一人麻の袂をしぼるとそ聞く

という歌がみえているが、この「かくれたる母」とは、おそらく離別された鶴子の生母ではなかったか。彼女は二川家に愛娘をのこして去ったのち、なお五十余年を生きつづけて、この年の秋に亡くなったのであろう。鶴子はただ独り、三歳で生別した母の死を思い、ひそかに慟哭したにちがいない。

鶴子が六歳の時、父相近は後妻として、鶴子には継母にあたる中村氏の女を迎えた。この女性は当時二十八歳であったようである。その頃は、相近の生母であり鶴子にとっては祖母にあたるひともまだ健在であった。鶴子はおそらくこの祖母の慈愛の中に育くまれたものと思われる。鶴子が十歳になった時、彼女の妹

瀧子が誕生した。二川玉篠である。そして翌文化三年鶴子の祖母も世を去った。この頃から、相近が一切の外出をやめ、家にこもるようになったのは、さきに述べたとおりである。

鶴子がどのような少女時代を送ったか、具体的なことは不明である。しかしこの間にあって、父相近の書家としての名声はいよいよ高まり、また和歌や音曲の方面でもすぐれた仕事をつづけていた。その父の許にあって、鶴子もまた父の薫育をうけ、和歌、国学や書の道の研鑽をつんだことは想像にかたくない。二川家の子孫である二川瀧三郎氏によれば、鶴子は性質もきわめて温順であり、父の助手をつとめたことを示す遺品などもあったという。特に記憶力は非常に確かで、相近も晩年には時々鶴子にたずねては、自分の記憶を確かめたといわれている。成長した妹の瀧子が父の外事秘書の仕事にたずさわったのに比して、鶴子は専ら内事秘書としてその才能を発揮したようである。

寛政九年八月、相近は長男の旗雄をうしなつてのち、再び男の子に恵まれなかった。したがって、鶴子は当時の慣習に従い、婿を迎えて家督をつがねばならなくなった。相近に

は多くの門人があったが、その中に鶴原方作という、鶴子より三歳年上の男性がいた。相近は彼を養嗣子として迎え、鶴子に配して、書家としての家業を継がせる事にしようである。すでに鶴子はこの時四十歳に達しており、文字とおりの晩婚であった。

鶴原氏は黒田藩の御医師を勤めた家柄で、鶴原雁林と名のり、その住居は雁林丁（現 大名一〜二丁目、赤坂一〜二丁目、天神一〜五丁目）とよばれるほどの著名な医者であった。寛文年間には四百石、文化年間と慶応年間の分限帳には五百石を食んだことが記されている。いわば黒田藩歴々の御典医であった。二川家とはかなり家格に差違があったにもかかわらず、この婚姻が藩庁から許可されたのは、相近に対する藩主の心添えがあったにちがいない。方作を相近の養嗣として迎える請願が、正式に藩庁に出されたのは天保七年、相近が七十歳の四月である。これより先、この年の正月頃、相近は書業の続否についての伺書を藩に出しており、継統差支えなしという指令を得ていた。ただし、藩庁では相近に対し、七十歳までは勤仕をするように命じたようである。

能古博物館だより

方作養嗣のことが許されたことで、相近のほりつめた気がゆるんだのであるうか、この年の九月、相近は七十歳の生涯を閉じた。十二月二十二日、すでに二川友古(ともふる)と称するようになった方作に「一代書家の御意を以て、表面上、家督相續の事」が許された。鶴子との婚姻はおそらくその後のことであろうと思われる。友古は、相続の翌年、藩主の書学の御相手をうけたまわり、御納戸組に加えられた。相近の養嗣としては十分に家名を保ち得た人であったといわれている。また若年の頃には兵法の奥儀一卷もさずかっていたといわれ、武芸においてもみるべきものがあつたようである。その人格は謹厳でかつ和親の趣きがあつたと伝えられている。彼はまた和歌などもたしなんだようである。『山里和歌集』などにその作品をみることが出来る。友古と鶴子の間には、子供がなかった。彼らは鶴子の妹で、鶴子より九歳年下の瀧子に婿を迎え、家を継がせることにした。これが後に述べる野村新三郎貞貫の二男鉄太郎である。貞貫は国老野村氏の流れを汲み、御馬廻四百拾参石余を食む、福岡藩士で、その後妻が有名な女流勤王家であり歌人であった野村望東尼である。

二川家と野村家とのかわりには、そう早くからではなかったようである。おそらくは、貞貫、望東尼夫妻の和歌の師、大隅言道あたりを介して知り合うようになったのではないかと思われる。言道は、近世後期が生んだすぐれた歌人であり、歌論『ひとりごち』『こそこのちり』や、歌集『草径集』などを遺した、当時ユニークな歌風をもつた人であった。彼は相近を師として国学を学んだが、言道だけでなく、大隅家の人々は書あるいは和歌などを相近に学んでいたらしく、相近が亡くなるまで、かなり深い交渉が二川家との間にあつたようである。相近が亡くなった時、その三回忌における歌など、相近と言道との関係を物語る資料ものこっている。

この言道を、またなき良き師として入門したのが、野村夫妻であった。言道をとおして望東尼らと交わりをもつようになった相近は、おそらく二女の瀧子に迎える婿のことも、折にふれて夫妻に話していたのではなかったか。また野村夫妻も、相近やその娘たちの学才に、少なからぬ畏敬の念をいだいていたのではなからうかと思われる。望東尼の歌集『向陵集』には、相近とのかわりを詠

●平成3年3月8日〜28日
当館にて西南学院大学の博物館
実習が行われました。

学芸員実習を終えて

西南学院大学文学部
鶴田美和子

能古博物館での三週間は、私にとつて忘れることのできない日々でした。船を降りて、館までの道々に咲いている草花や、雑木林の樹々は、毎朝私の目を楽しませてくれました。



心に残っているのは古川館長のお言葉です。「いつも美しいものを身の回りに置いていなさい。美しいものとの出会いが多いほど、人生が豊かになりますよ。」館長は、ご自分が和紙で作られた名刺をくださいました。また、館長が使っておられる文房具も見せてくださいました。そんな日常の細々した愛情を窺うことができ、周辺にあるものから美を発見することを教えられました。私も、美術館に限らず、身の回りの小さな「もの」にも愛情を持って接する心を持っていたいと思えました。(写真＝研修室にて)

した。館内の受付や喫茶店のテーブルには、いつも野の花が飾ってあり、職員方の優しい心遣いが心をなごませてくれました。

実習の間、館の方々、講師の方々、また、島の方々から多くのことを学びました。その中で、特に私の

- 井口万里さん・荒井慎一くん・稲生美穂さん・鶴田美和子さん・安丸聖子さん・牛島麻美さん・坂口陽子さん・辻朗祐子さん・森 朋子さん・樋口久美子さん・福山勅子さん・大久保玲子さん・柴田美音子さん
- 十三名の皆さん、今後の活躍をお祈りしています。

能古博物館だより

んだ歌が、いくつも見られる。

鶴子の妹瀧子と、貞貫の二男鉄太郎との婚姻は、天保十四年(一八四三)のことである。当時、瀧子は玉篠の号をもつ閨秀画家として、また書家として、才媛の名をほしいままにしていたが、年令はずでに三十九歳に達していた。これに対して夫の鉄太郎は二十七歳、花嫁より十二歳年下の花婿であった。当時としてはいささか奇異な感じがしないでもないが、三年後の弘化三年には、男の子が誕生している。

瀧子の生母で、鶴子にとっては六歳から育ての親として仕えてきた継母が世を去ったのは、嘉永元年(一八四八)三月である。四十歳近くまで独身をとおした愛娘の瀧子が婿を迎え、二川家の後継者となる孫を得た安堵があったのであろう。二十八歳で二川相近に嫁して以来、四十七年間、夫に仕え、またすぐれた天分をもつ二人の娘達を育て上げて、その務めを終えた彼女は、静かに七十五年の生涯を閉じたのである。

二川家の養嗣となった鉄太郎は、幸之進相遠と称した。彼は国学・和歌などもたしなみ、その書風も闊達であった。この頃にはすでに歴代の家業であった御料理人のことも別に

問題ではなくなり、書家としての家職を襲うことができたようである。

相遠は、性質も温和で、武芸にも秀いで、若年の頃には百三十余人に対し武者修業も試みたらしく、また柔術も初段の免許を得ていたといわれている。

相遠は安政五年(一八五八)四月、四十二歳で世を去った。望東尼の歌の中に、

安政五うまのとしの卯月十四日



鶴子父二川相近像
(庄村藤橋筆部分)

に、二川相遠がみまかりける、その前の日にとぶらひしを、今宵はここに留めたりしを、父君の待たせ給へばとて帰りけるに、

あくる日みまかりければ、しばしとてわれをとゞめし面影ぞ心にきえぬ形見なりける親をおきて先だつことをせぬ人もまかせぬ物は命なりけり親といはれ子といひそめし昔へや今の憂目のはじめなりける

こと果て、かしこより帰る時、雨の降りければ

子を思ふ道のそらとて親の身をかきくらしめても雨の降るらむ

とあるのは、この時のことである。相遠は、貞貫の先妻の子で、十三歳の時から、継母の望東尼に育てられ、才媛二川玉篠の年下の夫として平凡な人生を終わったとみられているが、春山育次郎氏はその著『野村望東尼傳』の中で「賢しき凡児」ということばで、彼の地味な生涯を評価している。

友古・鶴子夫妻は、相遠が亡くなった時、すでに六十の坂を越えていたが、十三歳の少年に成年した孫の将来に望みを託し、また五十四歳の未亡人となった瀧子も、その才名はますます高くなっていった。そして元治元年(一八六四)一月、福岡藩もまた歴史の荒波の中にもまれざるを得なかつた激しい動乱期の中に、鶴子の夫友古が七十二歳の生涯を終わった。つづいて慶応元年(一八六五)四月、瀧子もまた六十一歳で世を去った。相ついで愛する者たちに先立たれた鶴子のただ一つの喜びは、妹の忘れがたみであり、彼女にとっては孫にあたる幸之進(のち近と称す)がすでに二十歳をこえ、二川家の跡

目を相続できたことであつた。「慶応分限帳」の無足組の中に「拾六石四人二川幸之進升木屋丁」とあるのは、おそらくこの人のことであらう。

鶴子がその生涯を閉じたのは、明治二年(一八六九)三月十日である。円応寺の過去帳には「明誓智清禪女二川」とあつて名は無いが、他の資料に照らして、これが鶴子であることに間違いはない。彼女は、生涯をおしての師であり、また父であつた相近をはじめ、夫の友古、妹の瀧子らの眠る円応寺の墓域に葬られ、永遠の眠りについた。なお、現在は墓地改修のため、相近の墓をのぞいてはすべて二川家の墓として改葬されている。

【註】

- (1) 「その家系」中に述べられている。
- (2) 文久三年十一月成立。大隈言道の序がある。
- (3) 「その家系」中の叙述である。
- (4) 二川瀧三郎著「二川相近風韻」(二川相近風韻会発行昭和十一年刊)二八八ページ参照
- (5) 同右書二九一ページ参照
- (6) 同右二八五―二八八ページ参照
- (7) 同右二九一―二九三ページ参照
- (8) 「野村望東尼傳」(筑紫豊翻刻、文献社出版、昭和五年刊)二二二ページ参照

原題「真翁聞きがき」

真翁銅像ものがたり (六)

- ・大漁 つづく
- ・漁区入手と再譲渡
- ・サケ加工の理想

明治四十二年、日露漁業協約による北洋露領漁業は二年目を迎えた。

記念すべき初出漁は、残念ながら、支配人の不首尾で大失敗になった。

船主(持ち船)、又は備船による漁業経営者のこと。船主の多くは乗船しない(は備船料はじめ出漁夫の賃金、諸物資支払い、これに当初の漁区入札からの要費を考えると過大の損失と負債が生じたと思われる。

このため久保船主は、二年目の出漁資金の見込みが立たなかった。しかし、前年の出漁者情報は、初めての漁場で多少の違いはあっても、相当の成果を伝えていた。このため今季の出漁は、西出孫右エ門さん(現函館公海漁業社長の厳父)に肩替り出漁を得ることになった。ぼくは西出さんから漁区主務者兼通訳を依頼された。

前年の失敗を償うためにも、前船主久保氏に事業継続が望まれるが、本人は「面目ないが一年休ませてほしい、西出さんには君のことはよく話してあるから。」であった。西

出さんは千島列島ウルップの出漁経験者松野さんを介添えに付けて貰い、この人には教わるが多かった。

この二年目の漁区入札は、前年の継続租借となるので、ウラジオに開業する漁区契約代行業(日本の代書人に同じ)に委任入札と契約一切が手続きされた。こうした同一漁区の継続については、漁業協約の細目協定で認められていた。

また、前年の第一回漁区入札に際し、現地の日本総領事館から諸般の指導方針が示された中に、毎年入札で過度の競争をしないこと、とくに契約漁区の継続租借について、邦人漁業者は相互侵害しないことも指示されていたのである。この慣行は整然と実行されたので、露西亜側の認識するところとなり、後に漁区三年、または五年の長期租借契約(さらに十年まで延長)が認められることになる。ただ長期契約は割増料金が適用されるが、これは当然のこと、漁区長期使用が安定保障されることで漁区内設備が充実し、後に缶詰製造など北洋漁業に急速な進展をもたらしたのである。

同年の、ぼくの一漁期(約三カ月)の出漁手当は三百円、この前渡金二百円を得て、前年からの諸支払を完済して出発できた。

オベラ漁場では、ぼくの前年経験と函館滞在中の勉強、これは松野さんの協力も加わって、円滑に遂行でき、天候にも恵まれて予定を上回る大漁となった。鮭だけで八万一千尾、これに鱒も加わってギリギリまで満船しての帰港になった。

船主から特配金六百円を受けた。とかく、漁業は水ものといわれるが、今年の出漁で久保船主の去年の損失を埋めてなお余得が出たと評判になり、このほか函館は北洋漁業景気で沸いた。

帰漁後、ぼくは函館水産講習所に志願して通学。なお老練漁業者を訪ねて、その豊かな談話と、技術指導を聞くことに努めた。

翌四十三年は、すべて当初の船主に戻り、それに出漁経験者大井熊吉という人が支配人になっていた。

ぼくは、船主の要望で漁区の三年継続契約を得るため、ウラジオ出張をした。すぐ、野村総領事を訪ねて二年間の経験報告と謝意を表した。

ハルピンの川上総領事には、書簡と記念品を公用便として託すことができた。野村総領事は、七月には川上さんと同行で本音に行くことになっているが、川上さんは「君には出漁期で会えないだろう。」と話しておられたと聞き「残念ですがその通りです。」と答えるほかはなかった。

漁区手続きをすまずと、すぐ函館に直行帰国した。久保船主と大井支配人によって出漁準備が出来ており、再び大漁をする意気込みがうかがえた。ぼくの報酬は「鮭一尾に二銭、鱒は八厘の歩合取りにする。」と約束され、これは使用人から協力者に格上げされたことになる。なお、大井支配人は函館に残り、漁区運営はぼくに一任となった。

すでに、ぼくも二十八才、遠慮することもあるまいと承諾した。幸いに、この年も前年に劣らぬ大漁であった。ぼくの歩合は二、一六〇円、久保船主は大いに有卦(好調、大儲けすること)に入ったのである。

ぼくは帰漁業務を終えたと、すぐに水講に入り、塩鮭用の塩について日本と英国塩(三井物産輸入)の比較、また三井物産から要望される鮭缶詰の製法実験に参加した。

四十四年に入ると、久保船主は漁

区を拡張したいと希望、このため、ぼくは再びウラジオ渡航をした。オパラ漁区は、昨年の三年契約でそのまま、新漁区については船主が実績判断して一年契約でよいとされ、その通りにしたが、二漁区接続の理想的漁区を得た。前契約者の都合で、廃業返還されたもので漁業実績はAランクとされる好漁場だが、オパラから南下六十五露里(約七十軒)の距離があり、これがオパラと新漁場の両区経営の難点になると思つた。

帰国して新契約漁区の状態を話すと、久保船主は二漁区接続が気に入つた。同漁区の実績は、函館で露領漁区すべての情報を季節稼働の漁夫から得ることができる。船主は、数日のうちに、ぼくの話の裏付けと詳細な確証を得たらしく、好気嫌であつた。これに、前年の同漁区に出漁した作業員まで採用していた。

「今回は、漁区も殖えたので、大井支配人も現地に行かせる。兩人協力して頑張つてほしい。ただ、二人の歩合は、鮭について五厘下げ(一錢五厘になる)、鱒の八厘は六厘に。」という話である。漁区の拡張に比例して、ぼくの歩合取りが大きくなるのが惜しいと考えたのであろう。実際は、オパラと新漁区は七十軒

の距離があり、交通機関はおろか、道路もないカムチャッカである。両区間が平坦な原野としても、徒歩で三日はかかる。もし現地に河川その他の難所があれば迂回する以外になく、なお日数を要する。将来は、現地漁業者の連絡と協調を得て相互に漁区の交換、接近または、統合が考えられるが、現状ではオパラと新漁区は個別に管理操業する以外にないと進言した。

久保船主は、オパラ漁区から南に七十軒を好条件と判断しており、新漁区は自分直営にし、オパラはぼくに譲つてもよいと、思いもよらぬ話を始めた。ただ、ぼくがウラジオ総領事館と特別の関係があるとの思い過ぎがあり、将来も自分のための漁区確保に協力をしてほしいとの要望である。

なお、両地操業は就航船二隻の保留を新漁区とした。ぼくはこれに対し、現地要員の期間滞在を漁区に設備するまで、就航船に宿泊させる必要があり、帰国の際にも同様の事情があるので、各漁区にそれぞれ碇泊保留する必要があると再言したが、要員と資材を卸した後は新漁区係船に強くこだわりの続けた。歩合の値下げといい、係船の考え

方には、ぼくも嫌気がさした。そこで新漁区は来年に長期改訂を約束し、オパラの譲渡条件を聞くと、金五千円ではどうかという話になった。ぼくは昨年の歩合手取りを加えて二千円余の貯金があり、それでは即金二千円、残金三千円は今季漁期後に全額決済ということで、久保氏は承諾した。

これで、ぼくはオパラ出漁の備船と要員、資材の準備に迫られるが、もうこうなれば瓢箪から駒が出たやうなもので、久保氏に二千円をすぐに支払い、まずオパラ漁区の權益を確保した。久保船主は大井支配人と共に、自ら現地に四月中旬早やばやと用船二隻で出発。この二年つづきの北洋漁業好調に魅せられ、管理的に不便となつたオパラの整理を決心したことになるが、小事業者の経営としては良策と考えられるのである。さて、ぼくのオパラ出漁であるが、久保船主とぼくの話は、すぐ函館の話題になった。

北洋露領漁業は、すでに三年の実績を重ねた。日露戦争は幸いに勝利を取れたものの、戦後経済は振わず、新企業の開発もないため、国内事業家は漸く北洋漁業に注目するようになっていた。

この中で、北洋漁業の成功者として、堤清六(堤商会主)と、その支配人平塚常次郎の存在は、その操業が巧いこともあって有名であった。ぼくのオパラ出漁が、函館では関心を得たのも当然で、大いに足元を見られたらしく、突然に平塚常次郎から、ぼくの事業に投資、或は漁区譲渡の話が持ちこまれた。投資者は、東京の食品卸商として有名な、樽新さんこと森本新太郎ということである。

ぼくが、本人に面談させてほしいと言つと、平塚氏は早速連絡すると応じ、三・四日後に森本氏の到着を知らされ旅館で会見した。

江戸ッ子らしく、六十才としては大いに若々しく、気持ちの良い人柄がうかがわれた。

ぼくは思いもしない漁区權益を得たが、資本余力はなく、なお時期を重ねて支配人格で働くことが得策と考えて、オパラ漁区譲渡と、ぼくを、現地一切を宰配する支配人とすることを条件とした。

森本さんは、良質の塩鮭を卸商として確保、生産したい、そのために、良い漁区を一つ持つことと、決して多数漁区を経営する気はないらしく、この人なら働き甲斐があると確信。

漁区譲渡代は壹万円也。これは紹介者平塚氏の設定価格である。

森本さんは事業すべて、ぼくに任すと譲渡金全額のほか出漁準備資金三千円を、ぼくの支配人名義預金とし、帰京された。

漁区譲渡代金から七千円を国元に送金。これで両親に住宅を購入させ、残金は土屋直幹(現正興電機製作所

読者のコーナー

◎たくさんのお手紙を頂きましたので、その中から紙面の許す限りご紹介させていただきます。

○「能古の自然への愛着、人情の機微などにふれた能古に関する句数百の中から数句御送付頂きました。」

コスモスに来て美しき風となる
風の色移してをりし秋桜

そのかみの島の鹿垣四重五重
島山の蟲海鳴りに消されし夜
潮騒の夜は海鳴りとなる野分

福岡市 永田蘇水

○昨年能古という島を初めて訪れました。想像以上にすてきな所でした。展望台から見る志賀島も印象的でしたが、私は白鳥崎から大波

創業者)に相談、かねて、本人から勧められていた志賀島勝馬の山林買取を頼むよう連絡した。

幸いに、この年の出漁も、またまた大当りで、森本さんは漁獲の塩鮭、鱒の塩工合を函館で点検、身くずれなどを除き、大型のトロ箱に鮭十尾、鱒十五尾に詰め替え、東京向けに船便輸送。形くずれ品は函館で処分す

戸崎にかけての海岸線が好きです。そこから暫く玄海灘を眺めていました。素晴らしい一時でした。

小郡市 堀 雅昭

○古窯や館内展覧を解説して下さったおじ様本当にありがとうございます。伊能忠敬の地図には大感激でした。また、あの日は雨模様で外は寒かったので、展望室でお弁当を広げさせて頂いて助かりました。 大分県 住本しのぶ

【宮城県】 田中信彦・恭子様【兵庫

県】住本剛史様【福岡市】川口歩様・

竹内智子様・山崎智子様・重松典子

様・山口美矢様・小野真奈美様・石

川佳美様・金丸交枝様【大分県】住

本しのぶ様

◎ほかの皆様よりお手紙を頂きました。ありがとうございます。

るように任されて帰京。これらの収支詳細は森本さんに報告した。

久保船主の帰漁後すぐ、漁区譲受残金を支払った。ぼくの漁区については、とても出漁資金調達に見込みがつかないので、平塚氏の世話で資金協力者に譲渡するという形式を取ったと話した。

十一月、森本さんから、ぼくの契

能古自然を歩く会

さる三月二十一日・四月二十六日、恒例『能古自然を歩く会』を行いました。今回は、鹿垣探訪コースとして、かつて黒田藩ゆかりのお狩り場であった能古の歴史を垣間見ました。 帰館して、なごやかな雰囲気の中

茶山句会能古島吟行

鳥啼き虚空に萌ゆる大銀杏 多代

廻船に栄えし港豆の花 ゆき

火跡濃く残す藩窠果立島 一二三

座神に飛天笛吹く柿若葉 知恵子

葱坊主雨になりたる郵便船 寿美子

石棺を埋めし幾世を花は葉に 恭子

島裾に張る水はしる鳶の笛 公彦

約手当(年俸二千円)の送金を得た。森本さんの塩鮭は「高級料亭が使う鮭茶漬け」を理想にする。今いう新巻鮭である。

要は従来は塩鮭が農村と後進国向けから、高級食品に格上げする。これにぼくは、缶詰(鮭身の油仕込み)の現地生産が夢であった。

か、昼食をとったあとは、講座を開き、『粉食文化——そばの魅力——』と題した、西南学院大学文学部教授山中耕作先生のお話を伺いました。ユニークなテーマのもと、皆さんの熱心な受講風景が印象的でした。

今後とも『能古自然を歩く会』を続けていきたいと思っておりますので、新企画のご提案と、奮ってのご参加を心よりお待ちしております。

のぞき見る一雄旧居の青葉冷 博子
春愁は帆なき五ヶ浦御用船 志津子
春雨や土に還れぬ捨墓に 信子
柿若葉鶏鳴島の奥処より 静子
四月二十四日

於 能古博物館研修室

〔紙面の都合により多数割愛しました〕
〔たことお許しください。〕

けいしゅう
閨秀 亀井少栞伝 (八) 庄野寿人

自選詩集 結婚 良き婿どの

本稿の前号は、少栞詩作編の自筆本「窈窕稿乙亥」を紹介しながら、残念なことに紙面に余裕がなく、肝心の少栞筆跡の写真登載ができなかった。このため本誌に一部を挿入して鑑賞に供する。縮写は約25%。

原本は、市内西区今宿の少栞旧居にお住まいの後裔「亀井准輔」氏が伝世ご所蔵されている。本誌のため貴重な少栞自筆本の撮影をお許しいただいたもので、失礼ながら本誌面を以て感謝を表します。



少栞自選詩集「窈窕稿乙亥」は、彼女の何才頃からの作品であろうか。以下、この考察をして見よう。
まず彼女の作詩が最も早く記録に見られるのは、文化五年（一八〇八）三月、十才の少栞を父昭陽が後に記述する「烽火日記」に登場させる。これは本稿の内に引用、さらに前号にも抄述しており、再びくりかえしになるが、昭陽が少栞と旧門弟の平戸藩士を同伴して福岡城下東郊の須恵に行遊する途中、茶店に小休止して周辺のすぐれた春景をとらえて三人が分韻詩をした記事がある。
この時、少栞は喜色を示して分韻詩に応じたことは、すでに相当の詩作力をつけているわけで、その以前の詩作があつて当然となる。
「窈窕稿乙亥」の九四詩には、自分の少女期作品にも目を通し、多少の推敲（詩文の字句を何度も練りなおすこと）を加え、選集にしたと思われる。本書中の詩題「江春晚望」とした七詩、また「江村書事」とする五詩、「客中春雨」の二詩、「春江」と題する二詩、「園圃小景」とした一四詩、以上すべて七言絶句。これに、「田園楽」と題した五言律の三詩にも、必ず十才以前の少女期作品があると断定されよう。

ともあれ、本書は少栞生涯の独身期詩集である。
少栞は、翌文化十三年（一八一〇）の十二月十七日、十八才で三苦源吾二十七才と結婚する。夫君となった源吾については、これも本稿内に詳述しているが、なお簡潔に述べておこう。十年前の文化三年九月、支藩の秋月藩主朝陽公の江戸参勤に父昭陽が随行したのに、三苦源吾ほか二名が昭陽従者として列中に加わった。江戸滞在の約七カ月を経て翌四年四月に昭陽以下三名が無事に帰国した後、源吾は祖父南冥と父昭陽に望まれて亀井家の医業相続が決定された。もともと亀井家は、曾祖父の聴因が医師として世に出ており、南冥は父聴因の要望によって、まず古学派の徂徠学を学んだ。このことは、まず医師たる以前の教養と人格を修業させた後に医術に進ませた父聴因のすぐれた見識による教育法であった。これによって南冥は父聴因と共に従来の姪浜から福岡城下の唐人町に移って医療を開業しながら学塾蜚英館を開設、期せずして名声を得る。この後十四年、安永七年（一七七八）五月、南冥は儒医兼帯（儒学と医術を兼ねる）を職名として福岡藩に登用された。

能古博物館だより

後に、福岡藩が東西両学問所を開校すると、南冥は西学問所(甘菜館)の惣受持(現今の学長職)と教授を兼ねるが、ほとんど学事と教職に専任しながらも、なお亀井家における医業はつづけた。

藩の南冥採用は、儒学を本分にしたものであるが、儒医兼帯とした事情は、藩内に儒学代々を世襲する竹田家を筆頭に数家があり、すべて朱子学派であった。これに徂徠学の実学性、学問は民生にありとする主張は、主に修身主義に立つ朱子学派に反発を招きかねないと、南冥を推挙した藩家老の気くばりによる。

亀井家の実情は、本来の業としての医療は南冥を継ぐ昭陽が儒学専門に立つためにも、医業の継承を源吾に求めたことになる。

亀井医療には聴因につづく南冥の進歩的な診療によって、父子相伝の忠家とその信頼があった。その最たる存在は、平戸藩領の生月島を根拠にして西海捕鯨の王者と呼ばれた益富氏である。益富家は、亀井南冥を主治医とし、また学問も徂徠学を認識して亀井塾に子弟を学ばせた。

源吾の生家は、怡土郡井原村(現糸島郡前原町)で、井原村は藩領内の首位に立つ大村で村高(一村の米

生産量)を井原三千石と呼称した。

この中で源吾の生家は上位の高持ち富農であった。亀井家とは縁筋に当り父昭陽と源吾は再従兄。源吾は二男で(字を復、号は雷首、雷首山人とする)早くから亀井塾に入り、江戸帰国後は医学を専修していた。

両人の結婚は、亀井家譜(万曆家内年鑑とした既製のもの)に丙子文化十三年「十二月十七日友婚、毀弊谷窈窕邸、造翠雲房」と、わずか一行の昭陽筆の書き入れが見られる。これを意識すると、友(少栗の名)と源吾の結婚挙式が済んだ。これですら不要になった少栗の居室(窈窕邸)と繋谷と名付けた部屋の壁仕切りを取り毀し、これを一室に改造し翠雲房の室号をつけた。これでわかることは、少栗十五才の成長に一室を造築、窈窕邸の室号を付け本人に専用室を与えた、と述べているが、これは広い部屋を壁仕切りして二室とし、一室を少栗に、一つを繋谷のままとしたのである。少栗不在になった窈窕邸は仕切り壁を撤去して、元の広さに戻して、新たに翠雲房とし、これに昭陽は自分の案を移して己れの書室にした。

この書室は、文化六年に増築したもので、広きこと弓を容るべしと表

龜陽文庫・能古博物館友の会

- (福岡市) 天谷千香子・桑形シズエ
- 養原 ヨネ・笠井 徳三・鬼塚 義弘
- 柳ヶ瀬健次郎・三宅 碧子・亀井准輔③
- 片桐寛子③・北原 章子・清田 友彦
- 近江 福雄・小田 一郎・松園 守一
- 永田 蘇水・古野 開也・岩重 一郎
- 長谷川陽三・財部 一雄・安川 民敏
- 村上 靖朝・竹中 弘起・廣瀬 忠
- 岡部六弥太・山内重太郎・野田和禮②
- 向井 盛信・小柳陽太郎・野田 元子
- 西嶋 洋子・柏 久・黒川 邦彦
- 速水忠兵衛・高田 浩二・馬奈木文衛
- 三好 恭嗣・田上 紀子・安松 勇一
- 山田由紀乃・上田 良一・西村忠行②
- 広瀬 猛・松尾 久・桑野 次男
- 大郷 孝子・片岡洋一②・青柳 繁樹
- 重松 義輝・青木 繁樹・中村 紀彦
- 星野 金子・岩重 二郎・吉村 雪江
- 坂田 泰滋・星野万里子・百田 孝
- 椎葉 和郎・和田 一雄・花田 範之
- 藤木 充子・俵 信夫・金江たま子
- 岡本 金蔵・中畑 孝信・木戸 龍一
- 玉置貞正②・森藤 芳枝・西島道子③
- 行成 宜貢・石川 文之・西川 真澄
- 片倉 静江・江口 博美・宮崎 和子
- 横山 智一・花田 菊子・山口 孝一
- 今村嘉代子・末松仙太郎・板木 継生
- 吉原 湖水・宮 徹男⑤・池上 澄子
- 安藤 光保・池田 邦夫・野間 フキ
- 和田 慎治・浦上 健・宮崎 集
- 都筑 久馬・斉藤 拓・柳山美多恵
- 吉村 陽子・柴野美智恵・大石 忠生
- 鹿毛 義勝・安永友儀・村上 昭子
- 安部 利行・久芳 幸子・長 正彦
- 久保 喜蔵・吉田 澄彰・西 正憲
- 鍋山 駿一・那須 博・桃崎 悦子
- 石橋 観一・江島 寿人・鬼木 善夫

- 岩下須美子・吉長秀子・土屋正直
- 山口朱美・磯崎啓子・大庭祥生
- 原 重則⑤・石橋七郎・森 真吾
- 森岡 栄・三角健市・織田喜代治
- (大野城市) 伊藤 泰輔・田代 直輝
- 大西 節子(春日市)・後藤 和子
- (筑紫野市) 川浪由紀子・脇山浦一郎
- 大森 節子・横溝 清・原 富子
- 西村 国典(太宰府市)・有吉林之助
- 竹浜いち子・大谷 桂介・石田 秀利
- 本木 康枝・古賀 謹二・蔵田はつよ
- 松本 久子・吉塚 隆一・吉田案山子
- 坂本 斉子・佐藤かね子・浅野 加代
- 田中ゆき枝・永淵 純一・宗兼 仁子
- 村上美恵子・中村ひろえ・野田 明子
- 矢野 杏子・安住美代子・長沢 悦子
- 佐々木 謙・松尾マキ子・平岡 浩
- 西尾弘造(筑紫郡)・結城 慎也
- 添田 耕造・西村 久夫・荒井 昇
- 田中 文子・与那利三郎・上野 イヨ
- 坂井 勝己・山口 藤枝・大串ハマ子
- 古川 ミチ・宮崎 秋子・八藤丸和佐
- 渡部 良子・寺島 輝子(粕屋郡)
- 酒井 俊寿・櫛田 正己・櫛田 猷子
- 斉藤 良一・神崎憲五郎・青木良之助
- 安武房子・松本雄一郎(宗像市)
- 大島 成晃・原田 國雄・木村 秀明
- (小郡市) 竹中 誠二・松澤アツ子
- (甘木市) 酒井カツヨ・佐野 至
- 泉 栄・三浦 末雄・具島 菊乃
- 井上 清③・宮崎 春夫・井手 太
- 田中トクエ・床島 静・富田英寿
- (小石原) 鬼丸 節次・高取 八山
- (糸島郡) 由比 章祐(柳川市)
- 川瀬 学・庄野 陽一(八女郡)
- 松延 茂(大牟田市)・嶽村 魁
- 古賀 義朗・杉原 守(直方市)
- 山本 利行(筑穂町)・大久保津智夫
- (荇田町) 木下 勤(鞍手郡)

能古博物館だより

現、この完成祝いを長州藩からの留学生「片山子沢」(塾長で昭陽の代講を勤めた)に祝宴の音頭を取らせ

少栗は結婚と共に、夫君源吾の井原村生家屋敷地に建つ「好音亭」を新居にして移った。

源吾は少栗との結婚によって亀井家に入籍、亀井姓を称する。これは福岡藩士籍に入ることになるが、この事は次の手続きと藩承認を得なければならぬために、早くから二人の結婚は、亀井家が所属する城代組頭の衣非氏(大組士・千百石)に届

また三苦源吾に対しては、井原村庄屋(三苦氏)によって「官命によって村台帳から源吾名を削除」したと

今日、残る源吾の遺墨および少栗との合作による詩賛落款印に見られ

る「亀井復印」は、以上を語るものである。

源吾の家族親となった昭陽も当人の源吾も、庶民から武士身分を得ることは強い願望であったことがわかる。また、組頭の衣非氏からは、以後の源吾扱いは「是以雷首為家内判之所由也」と。以後は源吾に要する公用文書には、昭陽の家内判によつてせよ、と命じられたもので、この記録は昭陽「空石日記」文政二年九月四日に見られる。

源吾は後に、「買両佩刀于江戸価四圓」と家譜に記録するが、大小刀揃いを江戸に注文、その価格四圓(圓は唐制で十兩をいう)は実に四十兩のことで、相当に美事な佩刀を買ったことになる。

少栗は二弟が幼いこともあって、父昭陽の著述の精写をはじめ良き助手を勤めたが、夫君雷首は少栗に劣らぬ昭陽補佐役となつて、二人の結婚二年後の文政元年九月から天保七年五月死去する直前まで昭陽の日記「空石日記」の記録が始まるが、これには源吾即ち雷首山人を、山人に略した彼の名前が随所に見られる。昭陽の信頼と情愛がわかる真に良き婿どのであった。

- 久保田正夫・(飯塚市)・小山 元治(久留米市)・野田 正明(浮羽郡)吉瀬 宗雄(北九州市)・平野 巖片桐 三郎・知足久美子・石垣 善治(佐賀県)・中山 重夫・甲本 達也佐々木信子・福水フミ代・山下郁夫池田裕保・堀田 和子(大分県)橋本 敏夫(熊本県)・浜北 哲郎(山口県)・大塚 博久(大阪府)小山 富夫・大塚孝太郎(滋賀県)小堀定泰(愛知県)・杉浦 五郎庄野健次(神奈川県)・中野 晶子(東京都)・片桐 淳二・山根 貞与(千葉県)・森 久(宮城県)田中 信彦(北海道)・船越谷嘉一註()は口倍数に負担()は前納年数です。

【協賛会員(個人)】

- 緒方 益男(佐賀)・伊藤 茂(倉屋市)立石 武泰(福岡)③・白水 義晴(福岡)出光 芳秀(福岡)③・菅 直登(福岡)木原 敬吉(飯塚)・大里 豊男(福岡)梅田 光治(福岡)・花田加代子(岡垣町)西村 俊隆(東京)・池田 謙介(福岡)今林 昇(福岡)・高原 敬治(太宰府)江崎 正直(大牟田)・中村 登(福岡)小川 恒之(福岡)・野口 一雄(福岡)大坪 正治(太宰府)・奥村 宏直(福岡)荒木 靖邦(福岡)・村上 五一(福岡)七熊 澄子(太宰府)・多々羅幸雄(千葉)早船 正夫(福岡)・七熊 太郎(長崎)庄野 直彦(直方)・永田 蘇水(福岡)七熊 正(長崎)

【協賛会員(法人)】

- 南九大みやび・池田謙介(福岡)葦 書 房(南)・久本三多(福岡)流通 共 済 株(花田積夫福岡)②物流システム株(平田真輝福岡)橋詰 工務店 株(橋詰和元福岡)

- 東洋特殊機工株(西尾敏明福岡)福岡流通警備保障株(村上五一福岡)タイム社印刷株(安部栄一福岡)株 笠 組(笠 忠夫福岡)博多ちくわ(株)魚嘉・松尾嘉助(福岡)権藤税理事務所(権藤成文福岡)協 通 配 送 株(今林 昇福岡)大牟田 運 送 株(南誠次郎福岡)山 島 運 送 株(山谷悦也福岡)株三谷設計事務所(三島庄一福岡)西尾トラック運送株(西尾秀明福岡)日 西 物 流 株(原 重則福岡)

友の会 年間3千円

(館)の活動、館誌購読と催事企画に参加 自然と文化の小天地創造

能古博物館の会

協賛会(個人) 年間1万円

〃 (法人) 年間3万円

館維持、資料収集、施設整備等の資

金援助を受ける

納入方法 郵便振替 福岡3160970

財団法人 能古博物館

右の会費受領は、その都度本誌に掲載

以後会費相当期間を名簿にします。

お願い ご送金は振替用紙(送料加入者

負担)をご利用下さい。用紙はご連絡

次第お送りします。

当博物館の活動、また絵画・古文書資

料など当館に皆様のご支援をお寄せ下さい。

能古博物館だより

昨年、九月一日から九月二十九日まで、約一ヶ月間、友人を誘って、英国一周の旅を試みました。「主婦の見た英国事情あれこれ」ということになりましたが、何らかのご参考になれば幸いに存じます。

さて、イギリスには、日本の新幹線に相当する「インターシティ」という高速ディーゼル列車が走っています。パス券で、追加料金を払わずに自由に乗れますので、時間的、経済的にも便利です。しかし、乗心地は、新幹線ほどよくありませんでした。ガタガタ揺れるし、騒音はするし、でも座席はゆったりして、向い合わせの席との間には、巾五十 cm 近くのテーブルがあり、旅行しながら本を読んだり、書類に通したり、食事を楽しんだりできます。座席がゆったりとして、テーブルが置いてあるなど、経済的ではないでしょう。でも、逆に見れば、よほど贅沢といえます。

私のロンドンでのホテルが、大英博物館から数分という便利なところにありましたから、二日がかりの博物館をゆっくり見学しました。まず、展示室に足を踏み入れた途端、思わず感嘆の声をあげました。何気ないようで、しかし整然とした洗練された雰囲気。緊張感を漂よせながらゆったりとくつろがせるものがあるのです。要所々々の説明もわかりやすく、レベルの高い内容で、オリエント、エジプト、ギリシア等の歴史が把握できるので、年間四百五十万人もの入館者があり、全館を歩くと四 km を超えるということですから、いかに広大な博物館か想像つきましよう。



ハンプトンコートパレス入口にて

ところで、私達は、滞在中に、数々の親切を受けました。旅の思い出として、景勝地の美しさが心に残るようですが、私の海外旅行の経験からいいますと、どんなに素晴らしい景色でも、その印象は時と共に次第に色褪せ、ただ人々から受けた数々の親切が、なつかしく思い出されるのです。本当に人と人、心と心の交流こそが、旅の一番の思い出になります。

この稿は、昨年十一月二十四日『能古自然を歩く会』での講座を、大変好評だったので、本誌にも掲載させていただきました。当日は、貴重な体験談とともに、椎葉先生のご好意で、イギリス旅行のすてきなお土産のジャンケン争奪ゲームを行ったりと楽しいひとときでした。

色褪せ、ただ人々から受けた数々の親切が、なつかしく思い出されるのです。本当に人と人、心と心の交流こそが、旅の一番の思い出になります。

かいま見た英国は、高い文化を持ちながら、一方では経済の不振に苦しんでいるようです。日本はいま、経済力に於ては、アメリカに取って代ろうとしています。文化面ではまだまだ英国に学ぶべき面が多いようです。でも、英国の対日感情は、十一年前に私が見た「成り上りの日本人」に対する軽べつの眼から、対等か、或いはそれどころか、親しみに敬意さえ混じった眼差しに替わっていると思えました。

自分の足で歩き、目で見る旅をしながら、人々との出会いと交流を楽しむ人が、少しずつ増えているようです。こんな人達も対日観の向上に大きな役割を果たしているのではないのでしょうか。

この稿は、昨年十一月二十四日『能古自然を歩く会』での講座を、大変好評だったので、本誌にも掲載させていただきました。当日は、貴重な体験談とともに、椎葉先生のご好意で、イギリス旅行のすてきなお土産のジャンケン争奪ゲームを行ったりと楽しいひとときでした。

本号執筆者の紹介

前田 淑氏

「福岡藩幕末歌人 二川鶴子」
福岡女子短期大学文学部教授

古川 善久氏

「現代郷土美術館の開設」
勸亀陽文庫能古博物館館長

庄野 寿人氏

「真鍮銅像物語(内)」
「関秀亀井少楽伝(内)」
勸亀陽文庫理事長

尚、本誌掲載の写真は、杉山謙氏撮影によるものです。

編集後記

現代郷土美術館オープンを機に多くの方より励ましのお言葉を頂いています。それらに添えて、能古から皆さんのもとに爽やかな風をお送りすることができたらと館員一同頑張っています。

・能古博物館ご案内・

開館 9:30~17:00 (入館16:30まで)
休館日 毎週月曜
(月曜が祝日の場合は次の日)
12月29日~1月2日
入館料 大人300円・中高生200円
交通 姪浜 能古行渡船場→フェリー(10分)
→能古(徒歩5分)→博物館
〒819 福岡市西区能古522-2
☎(092) 883-2881・2887
FAX(092) 883-2881